



岐阜新聞創刊145年記念

フランス近代絵画の祝宴

幸福な絵画というのは、生涯の終わりになってもなお
人に幻想を与え、ときには喜びを引き起こす

——ピエール・オーギュスト・ルノワール——
（ピエール・オーギュスト・ルノワール『ピエール・オーギュスト・ルノワールの自画像』1871年、油彩、30×24cm、日本美術院蔵）

2026.9.26sat. – 12.13sun.



Gustave Moreau
Camille Pissarro
Paul Cézanne
Auguste Rodin
Claude Monet
Odilon Redon
Pierre-Auguste Renoir
Paul Gauguin
Vincent van Gogh
Georges-Pierre Seurat
Émile-Antoine Bourdelle

Edvard Munch
Paul Sérusier
Henri de Toulouse-Lautrec
Wassily Kandinsky
Pierre Bonnard
Émile Bernard
Henri Matisse
Maurice Denis
Georges Rouault
Albert Marquet
Maurice de Vlaminck

Pablo Picasso
Georges Braque
Marie Laurencin
Maurice Utrillo
Jules Pascin
Léonard Foujita
Marc Chagall
Ossip Zadkine
Moïse Kisling
Chaim Soutine
Françoise Gilot

—いま、祝宴のとき
絵を見ると、誰かと話したくなる。

19世紀末から20世紀初頭にかけて、フランスのパリに世界各地から集った芸術家たちは、互いに刺激を受け合いながら活動し、激動の時代を鋭くとらえる感性と、新たな表現の探求によって、美術の潮流を次々に花開かせました。

本展覧会では、笠間日動美術館と岐阜県美術館の西洋美術コレクションによる夢の共演が実現。印象派のモネやルノワールに始まり、ゴッホ、セザンヌ、ゴーギャン、そしてマ蒂斯、シャガール、藤田嗣治、ピカソといった巨匠たちの200点を超える作品が一堂に会する、宴の時となるでしょう。

展覧会名	フランス近代絵画の祝宴
会場	岐阜県美術館 展示室3（岐阜市宇佐 4-1-22）
会期	令和8年9月26日（土）－令和8年12月13日（日） ※休館日：毎週月曜日（祝・休日の場合は翌平日） ※夜間開館：令和8年10月16日（金）、11月20日（金）は午後8時まで ※展示室の入場は閉館の30分前まで
料金	一般 1,300(1,200)円 大学生 1,100(1,000)円 高校生以下無料（ ）内は20名以上の団体料金 ※身体障害者手帳、療育手帳、精神障害者保健福祉手帳、特定医療費（指定難病）受給者証 または登録証の交付を受けている方およびその付き添いの方（1名まで）は無料 ※ミライロIDが利用できます
主催	岐阜県美術館、岐阜新聞社、岐阜放送
後援	在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ、朝日新聞社、NHK、岐阜放送局 協力（公財）日動美術財団、日動画廊 本展覧会は（公財）田口福寿会の助成を受けています



展覧会の見どころ

画家たちが制作に込めたまなざしに思いをはせながら、巨匠たちと対話する特別な時間をお愉しみください。

【おもな出品作家】(解説は図録より転載)

ピエール＝オーギュスト・ルノワール Pierre-Auguste Renoir

1841/リモージュ(フランス) -1919/カーニュ＝シュル＝メール (フランス)

「幸福な絵画というものは、生涯の終わりになってもなお
人に幻想を与え、ときには喜びを引き起こす」

ーピエール＝オーギュスト・ルノワール (レイチェル・バーンズ編、小勝禮子
訳 『日経ポケット・ギャラリー ルノワール』 日本経済新聞社 P.76.)

ルノワールは実在する女性をモデルとし、姿勢や身振り、表現方法を変えながら、裸婦という主題に繰り返し取り組んだ。目の前の人物と、長い絵画の伝統のなかで描き継がれてきた裸婦像のあいだを行き来し、ひとつのモチーフを素描から絵画へ、ときには彫刻へと展開していった。裸婦は、時代を超えた永遠の美を表す主題でもあった。本作品では、透明感のある色彩が重なり、互いにとけあいながら、身体と周囲の空間を形づくっている。この頃ルノワールは、アメリカの画家で批評家のウォルター・パックに「裸婦を見ると、そこには無数の細かな色合いがある。そのなかから、カンヴァス上の肉体を生き生きと震わせる色を見つけなければならない」と語っている。



ピエール＝オーギュスト・ルノワール《泉》

1910 年頃 油彩、画布 岐阜県美術館蔵

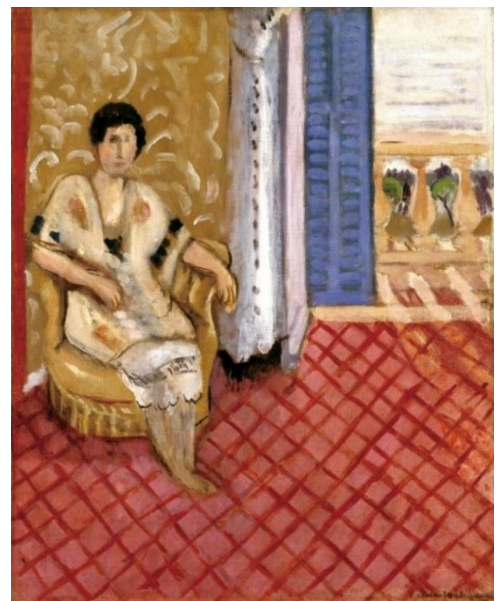
アンリ・マティス Henri Matisse

1869/ル・カトー＝カンブレジ(フランス) -1954/ニース(フランス)

マティスがニースを訪れ、その光について語った言葉
「毎朝この光が見られるのだとわかったとき、私は自分の
幸福が信じられませんでした」

ーアンリ・マティス (『マティス 画家のノート』 二見史郎訳、みすず書房、
1978 年、p. 142.)

北方出身のマティスにとって、南仏ニースの強く明るい光は特別な魅力を持っていた。1917 年の初訪問以来、毎冬同地で制作を行い、1921 年からは住居を構えた。本作は、ニースの海岸を望む「オテル・ド・ラ・メディテラネ」(「地中海ホテル」)で描いた一点である。マティスはこの時期、ホテルの室内を舞台にしてモデルや道具を配置しモチーフとした作品を複数残している。



アンリ・マティス《窓辺にすわる女》

1919-20 年頃 油彩、画布 笠間日動美術館蔵

パブロ・ピカソ Pablo Picasso

1881/マラガ(スペイン)-1973/ムージャン(フランス)

「もっとも恐ろしいのは、完成というものが、けっしてないということだ。『もう十分に仕事をした。さあ、明日は日曜日だ』と言えるような瞬間は、絶対やって来ない。止めるや否や、もう、また、はじめている。もう、これには触れまいといいつつ、一つの絵を片付けてしまうことはできる。だが、終わりという字を書き込むことは、絶対にできない。」

ーパブロ・ピカソ、エレヌ・パルムラン『ピカソは語る』瀬木慎一、松尾邦彦訳、造形社、1977年、6-7頁。

ピカソは晩年に至るまで自身の様式の破壊と創造を繰り返した。本作は82歳の作品である。「画家とモデル」および「アトリエの画家」という主題は生涯探究したものだが、1963年、老境のピカソは画家としての自分を見つめ直すかのように集中してこのテーマに取り組んだ。画面左上には、1920年代より親交を深めた銀行家でありコレクターのマックス・ペレケルに対する献辞が書き込まれている。



パブロ・ピカソ《画家とパレット》

1963年 油彩、画布 笠間日動美術館蔵

©2026 – Succession Pablo Picasso – BCF (JAPAN)

マルク・シャガール Marc Chagall

1883/ヴィテブスク(ロシア/現ベラルーシ)

-1985/サン＝ポール＝ド＝ヴァンス(フランス)

「私はただ部屋の窓を開けていただけだった。すると、青い空気、愛、そして花々が彼女と共に入り込んできた。白ずくめの衣装、黒ずくめの衣装で、彼女はずっと前から私の画布(カンヴァス)の向こうを飛んでおり、私の芸術を導いていたのだ。」

ーマルク・シャガール (Marc Chagall *Ma Vie*, Paris: Stock, 1983, p 170.)

祖国に戻ることも叶わず、波瀾万丈な人生を送ったシャガールだが、第二次世界大戦後は南仏の光に魅了され、1966年以降は南仏サン＝ポール＝ド＝ヴァンスに落ち着き終の住処とした。80代のシャガールが描いた本作には、画家が繰り返し描いた、花束、恋人たち、窓といったモチーフが、青を中心とした穏やかな色彩の中に浮かび上がる。引用は、シャガール唯一の自伝より。のちに死別することとなる愛妻ベラとの若き日の出来事を、詩的な文章で追想している。



マルク・シャガール《花束とカップル》

1919-20年頃 油彩、画布 笠間日動美術館蔵

©ADAGP, Paris & JASPAR, Tokyo, 2026 C5632

オーギュスト・ロダン Auguste Rodin

1840/パリ(フランス) -1917/ムードン(フランス)

「私は『イヴ』という彫像の制作に取り組んでいました。原因もわからぬまま、モデルの姿が変化していくのを見ていました。私は、次第に膨らんでいくその姿の変遷を、無邪気に追うようにして、彫像の輪郭を修正していきました。ある日、彼女が妊娠していることを知りました。そのとき、すべてが理解できたのです。[...] 確かに、イヴを表現するために妊婦をモデルにしなければならないなどとは、思いもよらなかったのです。私にとって幸運な偶然が彼女をもたらし、それがこの像の性格を際立たせるのに大いに役立ったのです。」

ーオーギュスト・ロダン (H. デュジャルダン＝ボメツツ、『ロダンとの対談』、1913 年)。



オーギュスト・ロダン《イヴ》

1883 年頃 彫刻・立体 大理石

岐阜県美術館蔵(田口コレクション)

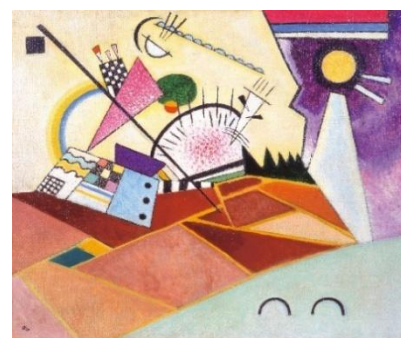
1880 年、フランス政府から装飾美術館の門を依頼されたロダンは、当時没頭していたダンテの『神曲』から着想を得て『地獄の門』を構想する。人類の始祖であり最初の罪人であるアダムとイヴを門の両脇に配し、肉体の死と魂の破滅を永遠に証言する存在として、鑑賞者をその先へと導くイメージに基づき、ロダンはイヴの罪と墮落への強い感情を表情と仕草に表していった。ところが、制作を進めている最中、モデルが妊娠するという予期せぬ事態が発生する。そのためイヴの石膏模型は未完成のまま残され、本作品のような別のバージョンが制作された。この石膏模型は、しばらくアトリエに放置され、未完ながらも、最終的には彫刻家自身によって独立した作品としてみなされた。イヴ像は好評を得、本作品のような大理石による小型の別バージョンが制作されることとなった。

ワシリー・カンディンスキー Wassily Kandinsky

1866 年/モスクワ(ロシア)-1944 年/ヌイイ=シュル=セヌ(フランス)

「現代の《抽象》の或る種のものは、最高の意味で、芸術的生命を具備している。すなわち、それらには生命が脈打っている、それらは生の喜びを発散し、眼を介して人間の内面を揺り動かす。純絵画的な方法で。」

ーワシリー・カンディンスキー「抽象芸術論考」『カンディンスキー著作集 3』



ワシリー・カンディンスキー《活気ある休息》

1923 年 笠間日動美術館蔵

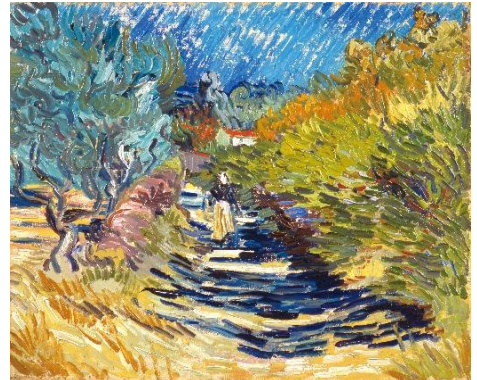
1922 年にバウハウスに赴任したカンディンスキーの作風は、有機的な抽象から幾何学的な抽象へと展開する。この時代の絵画の構成要素をめぐる研究成果は、著作『点・線から面へ』にまとめられた。本作はタイトルにあるように、淡い色調の中で、動的要素と秩序がバランスをとり合いながら画面を構成している。引用は、フランス画壇でいまだに敬遠されていた抽象絵画を擁護するため、1930 年パリの芸術雑誌『カイエ・ダール』にカンディンスキー自身が執筆した文章より。

フィンセント・ファン・ゴッホ Vincent van Gogh

1853/ズンデルト(オランダ)-1890/オーヴェール=シュル=オワーズ(フランス)

「タッチ、筆触とはなんと奇妙なものだろうか。戸外で風と、太陽と、人々の好奇心にさらされながら、できる限り仕事をし、大急ぎでカンヴァスを埋めていく。でもそんななかで真実と本質を捉えること。それはこの上なく難しい。しかし、少し経ってからこの習作に取り掛かり、描かれた対象に合わせて筆触を整える。するとたしかに、よく調和した見映えのよいものになり、清澄さや微笑まじさが加わっていく。」

ーフィンセント・ファン・ゴッホ (ファン・ゴッホ美術館編『ファン・ゴッホの手紙Ⅱ』園府寺司訳、新潮社、2020年、463頁。)



フィンセント・ファン・ゴッホ《サン＝レミの道》

1989-90年 油彩、画布 笠間日動美術館蔵

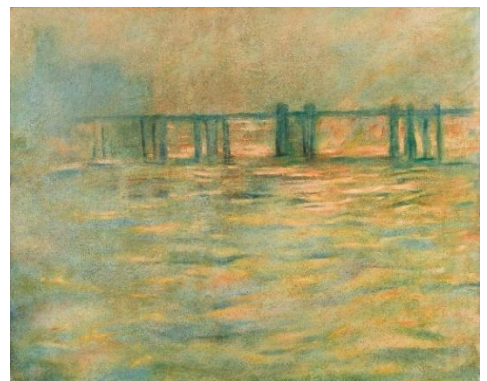
1889年、ゴッホは精神的に追い込まれ、自ら南仏サン＝レミ＝ド＝プロヴァンスの療養院に入る。発作の再発に不安を抱きながらも、療養院の空いている部屋をアトリエとして借りながら真摯に制作を続けた。本作は療養院の近くの景色を見て描いたものだろう。植物の生い茂る窪んだ道を女性が歩き、強い陽光が照りつける情景を、鮮やかな色彩と大胆なタッチで捉えている。画面左手には、この地でゴッホが大切にしたいモチーフであるオリーブの木が見える。

クロード・モネ Claude Monet

1840/パリ(フランス) - 1926/ジヴェルニー(フランス)

「テムズ川はまさに黄金色に輝いていました。なんて美しいことでしょう。あまりの美しさに、私は狂ったように筆を走らせ、太陽と水面に映るその光を追いかけて描きました。その間、各家庭の台所から煙が立ち上り、その煙のおかげで霧が立ち込め、やがて雲が湧き上がりましたー」

ークロード・モネ (D. ヴィルデンシュタイン、1985年、書簡1593)



クロード・モネ《ロンドン、チャリング・クロス橋》

1900年頃 油彩、画布 笠間日動美術館蔵

1870年におきた普仏戦争から逃れるため国外に出たモネは、霧に包まれた近代工業都市ロンドンを訪れた際にその独特の雰囲気魅了された。1899年から数年間、数回にわたり同地を再訪すると、テムズ川北岸のサヴォイ・ホテルに滞在し、バルコニーから見える景色を描き続ける日々を送った。時間帯に合わせて方向を変え、午後の時間には、南向きにチャリング・クロス橋の方向を向いて、目の前の光景が消え去る前に、光が変わるたびにカンヴァスを変えては画面にそのすべてを描きとめる。現場での即興的で大胆な筆致による描写の後、フランスのジヴェルニーに戻ってからの丹念な仕上げによって、一瞬を永遠の美へと置き換えていった。移ろいやすく気まぐれな気候と工場からの煙等を含んだ濃密な大気のヴェールを通して見える儂く繊細な光と色彩。その効果を捉えようとする挑戦は、モネに幽玄な世界観と豊かな色調のパレット、雰囲気のある神秘性を創造させ、その後芸術的到達点をもたらした。

展覧会関連イベント**えをみてえをかく展覧会×フランス近代絵画の祝宴**

◇日比野克彦がえをみてえをかく公開制作

9月26日(土) 13:00-14:30

講師 日比野克彦(当館長、アーティスト、東京藝術大学学長)

会場 展示室 [事前申込不要] [要観覧券]

◇記念講演会「名品を求めて―画家との出会い、思い出の作品」

9月26日(土) 15:00-16:00

講師 長谷川徳七氏(笠間日動美術館名誉館長)

長谷川智恵子氏(笠間日動美術館副館長)

会場 講堂 [事前申込不要] [無料]

◇美術講座

「フランス近代絵画と社会」10月18日(日) 14:00-15:00 担当 西田 創(当館学芸員)

「画家のパレット」11月15日(日) 14:00-15:00 担当 松岡未紗(当館学芸員)

会場 講堂 [事前申込不要] [無料]

◇ギャラリートーク

昼の部:10月11日(日)、11月1日(日)、11月8日(日)、12月6日(日)／各日 15:00-15:30

夜の部:10月16日(金)、11月20日(金)／各日 18:15-19:00

担当 展覧会担当学芸員

会場 展示室 3 [事前申込不要] [要観覧券]

◇文化の日スペシャルトーク

11月3日(火・祝)

講師 日比野克彦 (当館長、アーティスト、東京藝術大学学長)事前申込不要 [無料]

◇ナンヤローネ アートツアー

10月25日(日)、11月29日(日)

会場 展示室 3 [事前申込] [要観覧券]

◇パイプオルガン演奏会

10月11日(日)、12月13日(日)／各日 14:00-14:45

会場 多目的ホール [事前申込不要] [無料]

サランカホール連携コンサート STRINGS FESTIVAL 2026

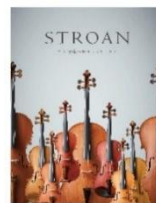
◇「ぎふ弦楽器貸与プロジェクト《STROAN》メンバーによるコンサート」

10月12日(月・祝) 16:00-17:00

出演 STROANメンバー

会場 多目的ホール [事前申込不要] [無料]

助成 (一財)地域創造



◇「B→C | バッハからコンテンポラリーへ関連イベント 辻彩奈ヴァイオリン プロムナード コンサート」

10月24日(土) 14:00-15:00

出演 辻 彩奈(ヴァイオリン)

会場 展示室 3 [事前申込不要] [要観覧券]

協力:(公財)東京オペラシティ文化財団



純喫茶もくじ堂 コラボメニュー(期間限定、数量限定)

会期中、「純喫茶 もくじ堂」(美術館南、県図書館内)で展覧会特別コラボメニューが提供されます。



マティスの「赤」のモーニング



モネの「白」のブイヤベース



藤田嗣治の「黒」のココア



ゴッホの「青と黄」のパフェ

同時開催**◆えをみて えをかく 展覧会**

令和8年7月23日(木)-令和8年11月8日(日)

◆クワクポリョウタ《LOST(Diversion)》

令和8年7月23日(木)-令和8年9月27日(日)

◆ルドンコレクションから:黒のファンタジー

令和8年7月23日(木)-令和8年9月2日(日)

◆ぎふの日本画 屏風 一大画面にみる美の世界—

令和8年9月8日(火)-11月3日(火・祝)

◆ルドンコレクションから:ルドンと駒井哲郎

令和8年9月29日(火)-令和8年12月20日(日)

◆NOA NOA ゴーギャンのアルカディア

令和8年10月1日(木)-令和8年12月20日(日)

◆アートまるケット

令和8年10月27日(火)-令和8年12月下旬

◆特集 鯉江良二:橋本コレクションを中心に

令和8年11月10日(火)-令和9年3月14日(日)

◆「それは何ごとか」佐藤慶次郎の実験

令和8年11月10日(火)-令和8年12月20日(日)

◆日本とイタリア

令和8年11月17日(火)-令和9年2月14日(日)

岐阜県美術館 企画展



広報画像貸出申込書

岐阜新聞創刊145年記念

フランス近代絵画の祝宴



貴社名		ご担当者名	
媒体名	(掲載コーナー、特集名:)		
ご住所	〒		
ご連絡先	TEL:	FAX:	
	E-mail:		

1. ご紹介いただける場合、貴媒体の情報をお知らせください。

掲載/放送	月	日	発売・放送(月号)/発行部数	部
掲載内容				

2. 広報画像はご使用になりますか。

☐ はい 画像データ到着希望日(月日) ☐ いいえ(写真は使用せず、文字掲載のみ)

3. 別紙の写真をご参照の上、ご希望の【画像番号】にチェック☑してください。

下記キャプションの作品名称、所蔵、クレジットを必ずご記載ください。

☑	番号	ご掲載時のキャプション表記
☐	①	ピエール=オーギュスト・ルノワール《泉のそばの少女》1887年 笠間日動美術館蔵
☐	②	アンリ・マティス《窓辺にすわる女》1919-20年頃 笠間日動美術館蔵
☐	③	フィンセント・ファン・ゴッホ《サン=レミの道》1989-90年 笠間日動美術館蔵
☐	④	オディロン・ルドン《神秘的な対話》1896年 岐阜県美術館蔵
☐	⑤	クロード・モネ《ロンドン、チャリング・クロス橋》1900年頃 笠間日動美術館蔵
☐	⑥	マリー・ローランサン《三人の踊り子たち》1937-38年 岐阜県美術館蔵
☐	⑦	ワシリー・カンディンスキー《活気ある休息》1923年 笠間日動美術館蔵
☐	⑧	ポール・セザンヌ《聖アントニウスの誘惑》1874年頃 笠間日動美術館蔵

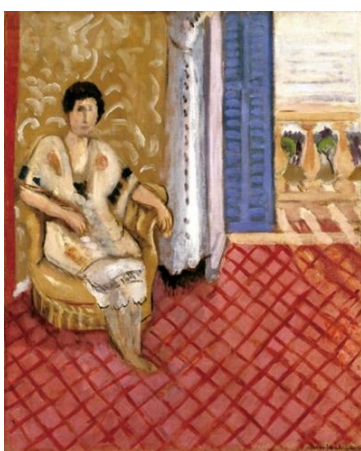
■広報画像一覧

①



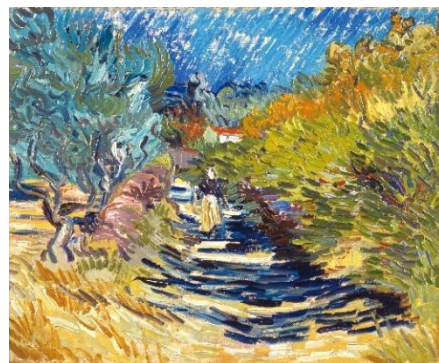
ピエール＝オーギュスト・ルノワール《泉のそばの少女》
1887年 笠間日動美術館蔵

②



アンリ・マティス《窓辺にすわる女》
1919-20年頃 笠間日動美術館蔵

③



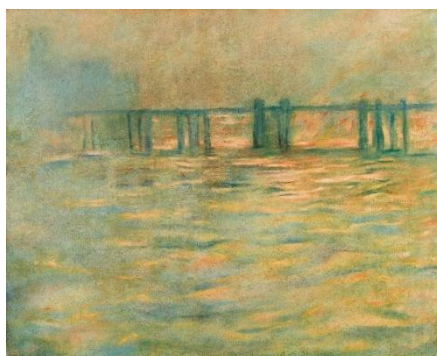
フィンセント・ファン・ゴッホ《サン＝レミの道》
1989-90年 笠間日動美術館蔵

④



オディロン・ルドン《神秘的な対話》
1896年 岐阜県美術館蔵

⑤



クロード・モネ《ロンドン、チャリング・クロス橋》
1900年頃 笠間日動美術館蔵

⑥



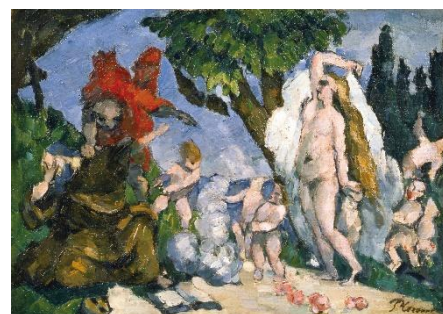
マリー・ローランサン《三人の踊り子たち》
1937-38年 岐阜県美術館蔵

⑦



ワシリー・カンディンスキー《活気ある休息》
1923年 笠間日動美術館蔵

⑧



ポール・セザンヌ《聖アントニウスの誘惑》
1874年頃 笠間日動美術館蔵

【広報画像使用に関する注意事項】

- 本展広報目的での使用に限ります。
- 展覧会名、会期、会場名は、必ず掲載してください。
- 作品画像は全図で使用してください。トリミングや文字を重ねるなどの画像の加工・改変はできません。
- 転載などの2次使用をされる場合には、別途申請いただきますようお願いいたします。
- Webサイトに掲載する場合は必ずコピーガードをしてください。
- 掲載・放送後は必ず、掲載誌・同録テープ・DVD等を、岐阜県美術館へ1部お送り願います。
- 会期中の会場取材・撮影をご希望の場合は岐阜県美術館までご連絡ください。